

# 職員リレーエッセイ

ニコニコデイサービス鶴里  
管理者 阿隅 貴臣

## 『距離』

さて、始まりました。今年度からの新しいコーナー「職員リレーエッセイ」です。今後、ニコニコハウスのいろんな職員が登場して、日常生活で普段感じていることや福祉に対する思い、はたまた自分の趣味など、自由なテーマでリレーエッセイを展開していこうと思います。まずは、言い出しっぺの私から書くことになりました。

何をテーマに書こうかなと思っていたところ、テレビをつけると、熊本地震関連のニュースが多く流れています。阪神・淡路の震災や東日本の震災の時もそうでしたが、避難所には多くの人が溢れかえり、支援物資の分配やボランティアの受入れ等の問題が聞こえてきます。そして、もう少し耳を澄ますと、避難所での生活が困難な障害者や高齢者などの苦勞が取り上げられているのが分かります。その苦勞とは、例えば、発達障害の少年が避難所でピョンピョンと飛び跳ねてしまうので避難所から出て車中泊をした、認知症高齢者が落ちつけず誰彼構わず話しかけてしまうので自宅に戻ったなど、総じて周囲にいる他者との関係に起因する困難性です。日常生活では、その存在を殊更意識することのない人たち同士が、避難所という限られた空間で長時間の避難生活を送ることが相当なストレスであることは想像に難くありません。

アメリカの文化人類学者のエドワード・ホールが、人がもつ対人距離の意識を、密接距離、個体距離、社会距離、公衆距離というように大きく4つに分類しました。たとえば、知らない人同士が会話したり、人前でも何かに集中できる距離として、社会距離（1.2m～3.6m）という分類がありますが、避難所においては、当然そんなゆとりはありません。日常生活では、「障害を持った人も、認知症の高齢者も住みよいまちにしていこう」という考えに共感し、温かい目で見守ることができる人でさえも、非日常の避難生活において、自分自身に余裕が持てないなかでは、同じように振舞うことは難しいことと思います。そして、そのような周囲の人の意識を察した人たちは、避難所に居たたまれずに車中泊をしたり、倒壊の危険があっても自宅に戻る選択をせざるを得ない……。

震災のニュースを通じて、普段私たちがあまり意識していない他者との「距離」の重要性、対人距離の精神的・社会的影響について、改めて考えさせられました。

被災地域の日も早い復旧をお祈り申し上げます。

次回は、南区障害者基幹相談支援センターの吉安さんにつなぎます。

低料第三種郵便物許可

平成 年 月 日発行（増刊）

A J Uニコニコハウス通信（第 号）（ ）